

早川孝太郎氏の『猪・鹿・狸』が大正十五年（1926年）郷土研究社第二叢書の一冊として刊行されたとき、私はさっそく購入して一気に読了したことを記憶している。早川氏は三河の出身で、故郷の生活を記述した『三州横山話』という本をこの『猪・鹿・狸』より前に出版され、多くの人に愛読された。人はだれでもふるさとに対してなつかしい心持ちを抱いており、それが年を経るにつれて強まっていくようである。その大きな機縁となるのは、故郷の自然、すなわち山水のたたずまいであり、そこに生育する動植物である。

早川氏は画家であったので、故郷について多くのスケッチを残されているのはもちろんであるが、一方また、民俗学者として、生まれ里の民俗についてこと細かに報告されているのである。それらの文章を読むと、氏が幼いときより経験され、長じて村の故郷を訪ねて聞かれたことが、いささかの誇張もなく紹介されており、われわれ読者の胸臆にひたひたと訴えてくるものを感じるのである。

この『猪・鹿・狸』は故郷の山野に棲息していた動物のなかから、題名に掲げた三つの動物を取り上げ、その棲息状態とそれを狩した人々の体験とが読者にも直接見聞したと思わせるように生き生きとした筆でしるされている。もちろん今日では早川氏の故郷の自然もすっかり変わってしまったとは思われるが、明治から大正にかけての三河の農村における生活には、われわれ読者にもなつかしい思い出として同感できるものがある。

わが国には狩に関する書物は決して少ないとはいえぬかも知れない。しかしこの『猪・鹿・狸』は、単なる狩の本ではない。狩人の生活を通じて、ふるさとの生活の心安さとのしさとを知らしてくれる本なのである。

早川孝太郎氏の文章は、その語り口と同じく静かに人の心に訴えてくるものがあり、自然にそれに惹きつけられていく思いがする。著者は本書の跋文に、三州の横山村は祖先以来の地で、生まれて十幾年間ほとんど一歩も外の地を踏まずに育まれてきた因縁の土地

である、境遇も感情もただの村人になりきっていたと記している。この郷土人の語ったふるさとの書が、今度新装をこらして学術文庫本として発刊されることとなった。数多くの読者にこれを奨めたい。

一九七九年七月